

幼 兒 教 育

第 二 十 四 卷 第 四 號

三

一人の尊嚴

人間は一人として迎へられ、一人として遇せらるべき、當然の尊嚴をもつて居る。たゞに、人間ばかりでなく、宇宙の一物と雖も、もの皆個體の存在をもつて居るのであるが、人間に於て、特に其の尊嚴をもつ。

之れは、必ずしも、心理學的にいはるゝ個性の別といふ意味ではない。個性は相對的のものであつて、一人の價値は其の個性の價値であるが、人間の一人は絶對のものである。各個の人間が銘々に有する、神聖なる尊嚴である。すなはち、すべての人間は、其の個性を尊重せられる權利をもつと共に、先づその前に、一人として迎へらるべき尊嚴をもつて居る。

此の意味に於て、一人を一人として迎へないことは、人間の尊嚴を冒すことである。一人の一人たることを忘れるのは、人間に對する最根本的の無禮である、

今われ等は、新らしき子供を迎えた。一團の新入園兒を迎えたのではなく、一組の新入學生を迎えたのではない。われ等の迎えたものは、その一人々々である。一人一人が、人間としての一人の尊嚴をもつて、われ等の前にあるのである。

一人々々たることを忘れるのは、人間に對する、すべての誤りの出發點である。一人々々たることを無視するのは、人間に對するあらゆる罪の基である。

幼きが故に、一人の尊嚴に、一毫のかわりもない。

(倉橋生)